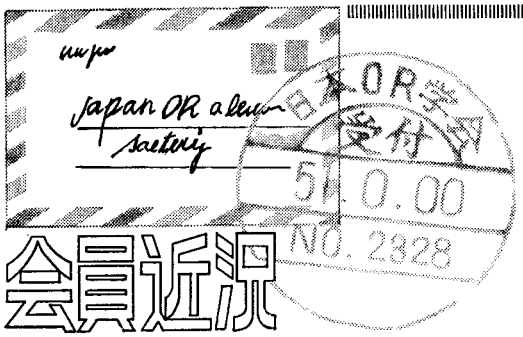

会員近況

仙波特許
技術士事務所　村田　秀雄

それでもORを信ず　さる企業の生産管理部門での仕事を離れてはや3年，もっぱら特許関係の業務に追われどおしの今日このごろです．中部支部での月例研究会に出席してみなさんの活発な討論を拝聴してはOR的雰囲気を満喫しております．

特許にはとくにORを導入して処理の迅速化をはからねばならぬ分野が多々あることを痛感しております．また商売柄中小企業の方々とお話する機会が多く，中小企業の現場にはいかにたくさんのOR問題が永年未解決のまま放置され，しかもそれに気づかずに毎日を大多忙の中にすごしている割にはもうかっていないのを見ると，小生持論の「現場でのOR運動」をQC運動的に展開する必要性をさらに強く感じます．

「あれだけ多くの金と頭脳をつぎ込んでOR的に推進したはずのマクナマラを頂点とするベトナム戦略が失敗に帰した以上，もうオレはORは信じないゾ」と吐き棄てたある社長さんの一言に，まったくドッキリさせられました．

それでも「何もしないということも立派なOR的選択の1つですよ」と言うと目を輝かせて同感を表明されたのを見て救われた思いがしました．

（他の所属学会）　日本機械学会

福島県河沼郡
会津坂下町立第二中学校　高久　信哉

教育界にたくさんあるOR問題　旧制の師範学校を卒業して以来，数学を中心として音楽を教えています．現在中学校は，都市のみでなく地方にまで，偏差値の問題，業者作成の問題使用，高校入試についての波がおしよせています．教育界は見たところORになんら関係のないような気もするでしょうが，見方によっては，豊富に資料があると思います．

たとえば，給食時間(配給・給食)や水道使用の待ち行列等いろいろあると考えられます．それらを掘りさげて1つの体系的なものにしてみたらと考えております．ずっと以前に青山先生がある月刊誌に連載されたことがあります．

それらを参考にさせていただいて，やってみようかと思います．なお，ORについての一般的関心は，少ないようです．それらの啓蒙も含めて，どしどし研究を深めてゆきたい．

そんなことをいま考えているところです．

三菱石油工務部
電算化グループ主査　玉木将二郎

激変のときこそOR　旧聞に属するが，一昨年12月，当社水島製油所で起こった大型タンク破損事故以来，約1年近く，瀬戸内海沿岸の重油汚染による影響，とくに生態系におよぼす影響の調査のため，大学の先生方のお手伝いをした．このような環境の激変に当面すると，本人の能力にもよるが，コンピュータやORなどを持ち出す余裕がなかった．

ところが，今年5月，招待されて，ヨーロッパの石油業界のマネージメント・システムのセミナーに出席したが，スウェーデンの環境庁にあたるところで，沿岸の生物学上の環境アセスメントを，総合的な観点から，コンピュータを使って組織だったアプローチをしているのを知り，反省させられた．

また，ここで，LPによる生産計画の補完的システムとして，コンピュータと人間の判断を組合わせたスケジューリングシステムが発展しているのを知った．これも実は，日本で提起されたテーマであったが，その後，ヨーロッパで約6年にわたる努力の結果，開花したものである．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

武田薬品工業
企画本部技術企画部　湊　晋平

ベスト&ブライテスト紹介　先般の政策科学研究部会の夏期合宿セミナーで，ハルバースタムの傑作「ベスト&ブライテスト」を紹介し私見を述べました．著者は著名なジャーナリストで，本書は1972年米国で出版されおどろくべき反響をまきおこしたそうです．

ケネディが集めジョンソンが受けついだ「最良にしてもっとも聡明な」バンディ，マクナマラ，ロストウ，ラスク等の人材は，いずれも米国社会の中・上流に生まれ神童と言われ東部のエリート大学の出身者であり，ケネディ政権の発足はこういう人たちを含むところから，知識層青年層を含む多くのアメリカ人に期待を持たしめた．この米国の誇るべき英知ある人々がなぜあのような愚劣きわまりないベトナム戦争の泥沼へとアメリカを引きづりこんでいったのか．

この本は，政権参画者の生い立ち，性癖，価値観，欲望，発言，行動を，ベトナム戦争の展開と立体的に結びつけ，描いている点，きわめてユニークである．

ハロッドは，いわゆる「近代的社会科学」は，えてして人間の行動を刺激(S)と反応(R)との関係として見ることが多いことを指摘し，これの事では問題あること，人間の内部には感情(E)があり，「S」は「E」による媒介を経て「R」を生む．「S」と「R」とが直結しているのでない．「E」は科学的処理しがたいことは明らかであるが，それが現に大きな役割を果していることを示しています．(「社会科学入門」清水幾太郎訳)

こういう立場から見た社会現象を科学的にとりあつかう素材として，またケーススタディと見ても，精読して指示される事項はきわめて多い．数式化とフォーマリズムの枠にかたまりやすいORを離れ，「生きたOR」を学ぼうとする人々の必読の本であると言えます．

日本科学技術研修所
霞が関情報センター技術課　内田　富夫

船体構造解析プログラム　PASSAGE　について　一般にある分野の問題ならだいたい何にでも通用するということが汎用性の意味するところと思われますが，私が最近講習を受けた構造解析プログラムPASSAGEの1つの特徴は，もう少し高い汎用性を持っていることです．つまり，データとしてPASSAGE独自のステートメント(おもに構造データ)とFORTRANステートメントが混在して書けるようになっていて，利用者はパターンの類似している構造物はあらかじめプログラムしておいて，あとは必要な寸法などを入力すればよいわけです．そしてこれらのデータはいったんFORTRANステートメントにすべて翻訳されたのち，コンパイルされてPASSAGEのデータ作成機能の一部に組み込まれ，これが実行されてはじめて解析のためのデータが完全にでき上がりとなるわけです．

この方式は構造解析の分野ではユニークなもので，数年前の造船ラッシュの時期に日本造船界の総力を上げて作成されたものですが，石油ショック以来パターンの類似した船を多数設計するという必要も少なくなり，1隻ごとに解析データをつくるとなると，このユニークな汎用性がかえって効率を悪くしてしまっているようです．

PASSAGEは石油ショックによって運命が変わったプログラムと言えるかもしれません．

大阪商業大学
商経学部商学科　清水　誠一

脱稿してホッとしたところ　ORの発展とコンピュータ・アプリケーションのさらなる進展は，自分の専攻する会計学の領域にも大きいインパクトを与えて以来，「情報会計」なる新しい分野が展開され，いくたのすぐれた論文が内外で発表されている．しかし，いまのところ，いずれも抽象論の域を出ていないように思われる．会計学は，実践的なものでなければならないという命題からすれば，そろそろ，抽象論から脱して説得力のある実現可能な具体性のある論議がなされてもよいと思う．

そのような背景のもとで，また，この一環として，小生数年前からあたためてきた「原価情報の伝達に関する研究」をこの夏休みに一気に脱稿し，一応ペンを置いてホッとした昨今である．ここでは，情報(原価情報)の伝達が有効であるためには，単に，適切な情報を造出する作業を有効にするだけでなく，伝達そのものに焦点を合わさなければならないとし，そのためには何を，どのようなチャンネルを通じて，だれに伝達するか，そして，伝達の有効性を保証するためにはどのようなことが結果されればよいかという問題を具体的，体系的に述べた．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．